

目次

はしがき……………松尾 聰……………一

研究篇

蜻蛉日記における戯画化の意味……………大倉比呂志……………七

『蜻蛉日記』下巻の道綱贈答歌群をめぐって……………菊地 靖彦……………三三

— 集團から集團への歌、及び代作ということに触れて —

平安朝文学における「かげろふ」について……………新聞 一美……………七一

— その仏教的背景 —

紫式部と『蜻蛉日記』……………坂本 共展……………一〇一

和泉式部日記表現論——その繰り返しの表現に注目して——佐藤 和喜……………一四〇

源氏物語の風景描写——自然と人物——……………清水婦久子……………一八五

夕顔巻の先蹤について——源氏の物語としての確立——……………藤河家利昭……………二七

歴史と虚構と源氏物語——夕顔巻のものけについて——……………鬼束隆昭……………二四九

『源氏物語』の「祭」をめぐる……………原岡文子……………二八五

大君 歌ならぬ会話……………武者小路辰子……………三九

『源氏大鏡』の形態……………田坂憲二……………三五

『源氏詞知』小引……………高田信敬……………三九

資料篇

『源氏詞知』(神宮文庫本) 翻印……………高田信敬……………四九

研究篇

作品世界において登場人物は作者によつてどのように肉付けされて語られているのだろうか。その一例として、登場人物が戯画性を帯びるべく語られている点に注目したいと思うが、その中でもとりわけ源氏物語における未摘花と近江君とが想起されてくる。両者はともに笑われるべき存在者として読者に機能していると理解されよう。

ところで、日記文学の嚆矢とされている土佐日記において、都に近付いた二月五日の条に、

①今日、からくして、和泉の灘より小津の泊りを追ふ。松原、目もはるばるなり。(中略)かくいひて、眺めつつ来る間に、ゆくりなく風吹きて、漕げども、後へ退きに退きて、ほとほとしくうちはめつべし。楫取りのいはく、「この住吉の明神は、例の神ぞかし。ほしき物ぞおはすらむ」とは、今めくものか。さて、「幣を奉り給へ」といふ。いふに従ひて、幣奉る。かく奉れども、もはら風止まで、いや吹きに、いや立ちに、風波の危ければ、楫取りまたいはく、「幣には御心のいかねば、御船もゆかぬなり。なほ、うれしと思ひ給ふべき物奉り給べ」といふ。また、いふに従ひて、「いかがはせむ」とて、「眼もこそ二つあれ、ただ一つある鏡を奉る」とて、海にうちはめつれば、口惜し。されば、うちつけに、海は鏡の面のごとなりぬれば、或人のよめる歌、

ちはやぶる神の心を荒るる海に鏡を入れてかつ見つるかな

いたく、住江・忘れ草・岸の姫松などいふ神にはあらずかし。目もうつらうつら、鏡に神の心をこそは見つれ。楫取りの心は、神の御心なりけり。

とあるごとく、陸地では地方権力者であつた前土佐守たる「船君」が船中においては「楫取り」の意のままにならざるをえなかつた点が語られており、傍線部のように作者貫之は「楫取り」の物欲に対して「痛烈な批判」¹⁾を浴びせかけているのと同時に、陸地においては恐らく歯牙にもかけなかつた「楫取り」のような人物に手玉に取られているありよう